



新田川(御新田川)

〔南さつま市金峰町宮崎〕

清らかな水が流れる現在の新田川（御新田川）。江戸時代中期の享保の頃から約300年もの間、田を潤し続けています。



御新田川疏水碑・頌徳碑

〔南さつま市金峰町宮崎〕

新田川（御新田川）の工事等を顕彰し、その功德を称える石碑です。大干ばつの翌年の昭和10年（1935）に建立されました。

【引用・主要参考文献等】

- ◆土持鋤夫 1927a 『加世田遊覧案内』浪速堂書店
- ◆土持鋤夫 1927b 『神代より藩政時代に至る 加世田の歴史』京都活版所
- ◆鹿児島県土木課 1934 『鹿児島縣維新前土木史』鹿児島縣
- ◆鹿児島縣立枕崎水産學校 1937 『枕崎の史と傳説』鹿児島縣立枕崎水産學校
- ◆桜井魯象・辻正徳 1963 『金峰郷土史』第一集 日置郡金峰町教育委員会
- ◆金峰町郷土史編さん委員会 1989 『金峰町郷土史』下巻 金峰町
- ◆前原政二 1964 『第七編 土木誌』『加世田市誌』上巻 加世田市役所
- ◆神田三郎 1964 『第十編 名勝旧跡誌』『加世田市誌』下巻 加世田市役所

（文／生涯学習課 橋口 亘）

新田川（御新田川）

南さつま市金峰町阿多・白川地区を流れる新田川（御新田川）は、今から三百年ほど昔、江戸時代中期の享保の頃に新田開発に伴って造られた農業用水路です。

当時、万之瀬川の取水口から山の多い地帯を経て水路を引くのは大変な難工事であったと伝えられています。

以来、約三百年もの長い間、田を潤し続ける新田川は、各時代における数多くの人々の尽力によって大切に守られ、維持・修補や改修等が行われてきました。

全国平均に比べ年間降水量が多い印象の南さつま地域ですが、これまでの歴史の中で干ばつに見舞われた年もありました。特に満州事変勃発の年から三年後の昭和九（一九三四）年の大干ばつは有名で被害も大きく、このころ加世田内山田の「鳴石」（雨乞いの神）について、鳴石の神様への雨乞いに効果が無かった際の理由として、鳴石の神様は雨乞いの神であると同時に戦の神であり、神様が満州に出かけて留守だったという旨の話まであったようです。

阿多地区に住む西田收人さんは、かつて父親（明治三十五年生まれ／故人）から、次のような旨の話を聞いたことがあるそうです。

「ある干ばつの年に、鉄道に乗り阿多の家に帰ることがあった。その時、鉄道の車窓から見た沿線各地の耕地は、軒並み水不足で被害を受けた様子だった。しかし、阿多まで帰ってきてみれば、新田川が潤す阿多の田んぼは美しく、青々としていた」

多くの人々に守られ、用水を供給し続けてきた新田川。今もなお清冽な水が滔々と流れ、付近の田を潤しています。